

[第47回]



インターナショナル エジュケーション サービス株式会社

代表取締役社長 **松本 和久** 氏

世界で活躍できるグローバル人財を育成する ～ビジネスの現場で真に必要なコミュニケーション力を伸ばす～

インターナショナル エジュケーション サービス株式会社様(以下「IES社」)は、「企業の成長をグローバル規模で発展させるための人財を育成する」という使命を持って、1969年に設立されました。現在同社の代表取締役社長を務めておられる松本和久様は、創業者ご夫婦の甥にあたられ、学生時代から同社の事業をサポートしてこられました。松本様は、1995年に近畿日本ツーリスト株式会社に入社後、主として国際業務に従事され、2002年の日韓ワールドカップ日本組織委員会事務局でご活躍された後、同年IES社に入社され、2018年に代表取締役社長に就任されました。

同社のグローバル人財育成研修は、業務内容に基づいた実践演習を通して英語力の向上やビジネスコミュニケーションのスキルアップを図る「業務に直結した研修(業務実践型タスクベーストレーニング)」であることが最大の特長であり、通常の英語研修会社では対象としない「建設・エンジニアリング業界に特化したビジネスの現場で真に必要なグローバル・コミュニケーション力」を短期間で習得できます。これを可能とするのは、様々な業界の業務に習熟した約100名の外国人講師、特に工学・テクニカル系のような業界専門の実務経験が豊富な講師による指導です。

今回のインタビューでは、「お客様企業のニーズをお聞きした上で、業界に特有の場面や状況を想定した真に必要なグローバル・コミュニケーション力を強化できるように研修を設計して提供する」とするIES社の研修内容について、松本様からじっくりお話を伺いました。



グローバルビジネスに 対応できる人財の 育成を目指して

— 御社の設立の経緯と松本様が入社されたきっかけについて、ご説明いただけますか。

松本 当社は、私の伯父と伯母が1969年に設立した会社です。伯父はアメリカ人で、1960年代の日本でマーケットリサーチの仕事をしていました。伯父は、日本の多くのビジネスマンが英語で挨拶すらできない状況を慨嘆し、国際化の時代に日本の企業人が海外へ出ていくに当たり、グローバル業務を遂行できる人財を育成するのが急務である、との認識に立ち、1964年東京オリンピックの通訳や英語教育の仕事をしていた伯母とともに、1969年に当社を設立しました。したがって、当社は画一的なテスト対策の英語やアカデミックな英語を

教える世間一般の英語研修会社とは異なり、ビジネスの現場で必要不可欠な実践的な英語によるビジネスコミュニケーション力を磨くことを目標としています。

ビジネスの現場では、業界ごと、シチュエーションごとに異なる英語力やビジネススキル、マインドセットが要求されます。建設・エンジニアリング業界では、技術指導や工程管理などの話が中心となりますが、金融業界では、資産運用や財務諸表の話、製薬業界なら臨床試験の話と、それぞれ全く異なる専門用語を使ったコミュニケーションを行うこととなります。個人が持つ実務力と英語力が掛け合わされて、「グローバルビジネスに対応できる人財」となると考えています。

—なるほど。建設・エンジニアリング業界は海外でビジネスを行うとともに、海外のオーナーやサプライヤーと交渉する機会も多いですから、そうした人財は不可欠ですね。

松本 建設・エンジニアリング業界の企業の皆様は、当社の設立当初から現在に至るまで、大変重要なお客様です。1980年代から、国家プロジェクトとして石油化学コンビナートのプラント輸出が行われるようになり、日本企業は東南アジアや中近東などに日本人社員を派遣するようになりました。ところが、現地でのコミュニケーションに苦労される方も多く、多くの日本企業からその対策についてご相談を受けました。そこで、当社では、現地のプロジェクトの現場で必要となる事柄を念頭に置いた英語教育のプログラムを作ることいたしました。具体的には、輸送手段、技術指導、安全管理といった話に関連した英語によるビジネスコミュニケーション力を鍛えるプログラムです。その際、お客様から具体的に発生したトラブル事例もお教えいただき、その解決に役立つケーススタディや英語表現を掲載した教材もつくりました。

—松本様は、2002年に御社に入社されたんですね。

松本 はい。伯父と伯母の会社でしたから、学生時代も英語の勉強を兼ねて、当社でアルバイトをしていました。大学卒業後、しばらく旅行会社で国際業務に携わっていましたが、日本人の皆様が海外で英語によるコミュニケーションに苦労されている状況を見て、これを何とか解決したいと考え、当社に入社することいたしました。

カスタマー企業のニーズに合わせた研修プログラム

—先ほどもお話しいただきましたが、一般の英語研修会社では学べない「グローバルビジネスの現場で必要不可欠な実践的な英語やスキル」をどのように教えていただけるか、具体的な御社の教育プログラムをお教えいただけますか。

松本 まず、当社が大切にしてきたものは、「お客様との対話」です。始めに、当社のグローバル人財研修の設計や開発を専門とする部門が、「お客様の課題は何か」をしっかりと現場目線でヒアリングして、ニーズや課題、求められる英語力やビジネススキルを分析させていただきます。当社では、多くの場合、現場の最前線に立つ事業部の皆様と話し合いを行い、現場のニーズをきめ細かく調査させていただきます。その調査結果を基に研修プログラムをご提案するわけですが、当然、研修を受けられる社員の皆様の部門や職種、さらに、現在の経験値や英語レベルによって、研修プログラムを変えていく必要があります。

例えば「大学を出てから何十年も英語に触れていないが、海外のプロジェクトの現場で働かなければならなくなった」という人と、「TOEICのテストでは700点くらいは取れるのだが、外国人のクライアントを目の前にすると、適切なプレゼンテーションができない」という人では、当然研修プログラムは異なります。当社は長年企業様向けのグローバル人財育成研修を行っており、様々なシチュエーションに応じた教材や研修プログラムの蓄積があります。その中には、実際のビジネスの現場を模倣し、当社の外国人講師が「日本人にとって扱いづらい文句の多い外国人スタッフやクライアント」を演じるロールプレイ、といったものもあります。さらに、お客様企業が実際にお使いになっている実務資料（例：スケジュール管理、コスト表、契約書の一部など）を持ち込んでいただいて、それをどのようにプレゼンテーションしたり交渉したりするか、といった実際のビジネス場面を想定した研修も行います。研修は、原則として、お客様企業に当社の外国人講師を派遣するかオンラインで行います。また、近年では海外赴任先とオンラインで結び研修をすることも増えています。

—御社には、どのくらいの外国人講師がおられるのですか。

松本 当社には、約100名の外国人講師が登録されています。当社の外国人講師の特徴は、単に英語を教えることがうまいというだけではなく、それぞれがエンジニアリング等の業界のバックグラウンドを持ち、現場での実務経験がある人たちです。したがって、通常の英語講師ではできない「現場には、



専門業界の現場経験が豊富な外国人講師による英語研修



外国人講師を訪問客に見立て、会社と製品について英語で紹介する研修



会議演習の研修



技術者向けの豊富な専門教材

英語を母国語としない人も多いので、より平易な表現が望ましい」とか、「そうした言い方では誤解が生じかねないので、別の表現が望ましい」といった実践的なアドバイスを行うことができます。まずは日本で、現場を「疑似体験」し、小さな成功体験を積んだ上で、実際の現場に行くことにより、無用のトラブルを回避することができるというわけです。

——確かに、いきなり現地に行くと非常に辛い思いをすると、精神的に追い込まれてしまう人も出てくる恐れもありますね。

様々なビジネスシーンに 適応した研修プログラム

——グローバルなビジネスが進む中で、様々な人財が必要となると思います。現場での工程管理や安全管理などを行う人も必要ですし、外国企業と様々な交渉を行う人や、現地の子会社の管理を行う人も必要です。それぞれについて、御社ではどのような研修プログラムを提供されるのでしょうか。

松本 まず大前提として、いずれのケースについても、ある程度の英語力がなければ、外国人とのコミュニケーションは取れません。細かく複雑な語彙は必要としませんが、少なくともTOEICで言え

ば、500点から600点くらいの英語力は必要です。当社では、そこまでの英語力のない方々のために、どのように自己学習していくかについて、日本人講師がアドバイスをするとともに、2週間に1回くらいのペースでコーチングして、英語学習の進捗度合いを確認して励ます、といったことを行っています。英語が苦手と感じている社員の皆様には、こうしたアドバイスとともに、上司の皆様から、「英語の習得が業務上なぜ必要か」「英語を習得することによって、キャリアパスが開ける」といったことをお話しいただくことも重要だと思います。

続いて、個別のビジネスシーンごとの研修プログラムの考え方をお話します。まず、プロジェクトの現場における工程管理や安全管理などを行う方々への研修ですが、海外業務に後ろ向きで不安がある、英語もあまり得意

でないという方でも、先ほど申し上げたような現場を模したプログラムなどを受講していただくことにより、異文化理解を深め、平易な英語による短文の表現で、現地で必要なコミュニケーションを取ることが可能になります。TOEICで500点から600点くらいの英語力をお持ちなら、3か月ないし4か月の研修でも全く研修をしないのとは比べてマインドや現地でのコミュニケーションスキルに雲泥の差が出ます。

次に、外国人と様々な交渉を行う、といった方々に対する研修プログラムもあります。日本人の欠点というか、日本の英語教育の欠点かもしれませんが、日本人は「文法的に間違った発言をすること」や「発音が不正確で相手方にうまく伝わらないこと」を極端に恐れる傾向にあります。その結果、外国人とのミーティングの中で、「何か違うのだが、何も言えない」とか、「感情的になっている外国人に押されてNOが言えない」といったことが起こり得ます。また、曖昧にニコニコしながら「YES、YES」と言い続け、結局最後に「NO」と言わざるを得なくなり、相手との関係を悪くする、といったこともよく聞きます。

利害が絡む現場での外国人との折衝では、文法が正しいとか発音がいいといったことは、重要なことではありません。「何をどう話すのか」「困難な状況でも粘り強く伝えたいメッセージをしっかりと伝えていくにはどういうコミュニケーションが必要なのか」「最後まであきらめずに交渉するためには、どのようなマインドセットが必要なのか」と



松本 和久（まつもと かずひさ）

1972年東京都に生まれる。
1995年立教大学経済学部卒業後、近畿日本ツーリスト株式会社に入社。2002年日韓ワールドカップ日本組織委員会静岡支部 輸送オペレーションセンター マネージャー。同年インターナショナル エジュケーション サービス株式会社入社。2008年11月取締役 研修企画開発部部長、2012年4月取締役 管理部部長。2018年10月代表取締役社長に就任、現在に至る。

ということがポイントであり、さらに、こうしたことを単に頭で分かっているだけでは意味がなく、実際にできるようになるまで外国人を相手に何度も何度も演習をして、フィードバックを受けて、ブラッシュアップしていくことが必要不可欠なのです。社員の皆様の英語コミュニケーションスキルの評価についても、当社では、「英語の文法や発音が正確であるか」といったことだけでなく、「何か言われたときに、黙ってしまわずに、何らかのクイックレスポンスで返せるか」「ご自身の意見をクリアに理由をつけて話せるか」「不自然な間合いを作らないか」といったことも対象としています。

当社では、現場を知り尽くした外国人講師が、実際の会議と同様の緊張感のあるディベートを行い、日本人のコミュニケーション力を磨くお手伝いをさせていただいています。海外で外国人を部下とする方を対象に、チームビルディングやリーダーシップの在り方に関する研修を行うとともに、部下にネガティブなことを伝えるにはどうするか、といったことを、外国人講師を「部下役」にして行う演習もあります。

—— 私も、在日米国大使館や英国大使館のパーティに招かれることがあるのですが、日本人の参加者は日本人同士が

集まり、外国人とあまり話さない人が多いような気がします。また、誰ともコミュニケーションをとらず、「壁の花」となっている人も見受けれます。

松本 そうですね。会食やタクシーの中で雑談ができない、という方は結構おられます。当社では、そうした方々に対するアドバイスとして、いくつかの話題、例えば、その国の印象などに関する質問のパターンを覚えておくことを提案しています。外国人講師10人くらいを参加させて、パーティの練習を行うこともあります。

お客様から感謝を頂くことが最大の喜び

—— 最後に、松本様ご自身のことをお伺いしたいと思います。大変なお仕事だと思うのですが、どのような時に生きがいを感じられますか。

松本 お客様企業のニーズをお聞きして、いろいろなことを企画・提案して採用していただいた結果、「プロジェクトがうまく進んでいるよ」とのご連絡を受けたり、実際に現地に行った人から、「研修が大変役立った」というお声を聴

いたりすると、大変うれしく思います。あるお客様から、「海外プロジェクトを遂行するに当たって、異文化の理解やコミュニケーションの齟齬によるトラブルで工期が遅れると、数億円の損失が出る。これを考えれば、社員研修への投資は、極めて安い」とおっしゃっていただきました。当社には、現在約100社のお客様企業がおられますが、多くの企業が長年当社とお取引くださっており、これも当社の研修サービスにご満足いただけているからだと思っています。

—— 本日はお忙しいところ、ありがとうございました。



インタビュー後記

私は、40代からずっと英会話学校に通っております。始めは、通訳学校に通い、現在は、英国政府の関連団体であるBritish Councilで主に英国文化を勉強しております。

私の経験をもとにお話しすれば、IES社の英語研修は極めて実践的である、と感じました。特に、日本人の場合、かなり英語が話せる人でも、会議で積極的に発言できない人が多くいます。特に若い世代の方々には、頑張りたいと思います。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一



企業データ

社 名：インターナショナルエジュケーションサービス株式会社
事 業 内 容：企業・官公庁向けグローバル組織・人財開発コンサルティング、学校向け国際化支援事業
設 立：1969年1月
所 在 地：東京都渋谷区東2丁目22-14
ロゼ氷川ビル 2F
従 業 員 数：142名(2024年12月) ※外国人講師含む
ホームページ：<https://www.iesnet.co.jp/>

エンジニアリング
業界向け研修

